

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



## Data

監督: マイケル・アプテッド  
脚本: トム・ストップワード  
出演: ダグレイ・スコット/ケイト・ウィンスレット/サフロン・パロウス/ニコライ・コスター・ワルドウ

## 👁️👁️ みどころ

ドイツ軍が誇る暗号システムである「エニグマ」のコードが突然変更された。これを解読できなければ、大西洋を横断する大輸送船団はドイツのUボート軍団の餌食だ。暗号解読と歴史上に隠された大事件の秘密をめぐる繰り広げられる知能戦は圧巻。第1級のおすすめ作品だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <エニグマとは?情報の大切さ>

エニグマとは、「ドイツ軍が開発した暗号システム」のこと。最近問題となった「SARS」騒動の中で、中国の情報管理の甘さ、隠蔽体質が問題とされたように、「情報」の大切さは、今や全世界共通の認識となっている。

とりわけ戦争中は情報が大切だ。というよりも、情報によって個々の戦闘や全体の戦局の行方が左右されることになる。日本人なら、1941年の「真珠湾攻撃」の成功や1942年のミッドウェイ海戦の失敗などを考えれば明らかだ。

ドイツが誇る暗号システム「エニグマ」の解読をめぐる戦い(知的ゲーム)は、第2次世界大戦の行方を左右した大きな要素だった。

ちなみに、映画『U571』(2000年)は、ドイツ軍のUボートから「エニグマ」暗号機を、ドイツ軍に察知されないまま奪取する戦いをスリリングに描いた傑作だ。

### <ベストセラー小説をミック・ジャガーが初プロデュース>

この映画の原作は、1995年にイギリスで出版されたロバート・ハリス著の『暗号機エニグマへの挑戦』。出版後、すぐにベストセラーとなり、23カ国で、翻訳、出版されたとのことだ。そしてこの映画『エニグマ』をプロデュースしたのは、ミック・ジャガー。

1964年にデビューしたロックグループ、「ローリング・ストーンズ」のヴォーカリストとして超有名だ。

### <複雑だが、すばらしく緊張感あるストーリー>

この映画の本筋は、突如「エニグマの暗号コードが変更された」ことから始まる。しかも、時期が最悪。この変更コードの解読ができなければ、大量の輸送物資を積み込んで大西洋を航行する大輸送船団が、ドイツのUボート軍団の餌食にされることは確実だった。そこで、急遽、ブレッチリー・パークにあるイギリスの暗号解読本部へ主人公トム・ジェリコ（ダグレイ・スコット）が呼び戻された。トムは、一度「エニグマ」の暗号解読に成功した天才数学者だ。本部はトムの協力を得て、懸命に「エニグマ」の変更コードの解読に挑む。これが本筋のストーリーだが、これに絡まる伏線が面白い。

その第1は、トムの恋人クレア・ロミリー（サフロン・バロウス）の存在とその役割。クレアは暗号解読本部で働いている職員だが、クレアに声をかけられて「親密な関係」になったトムが、仕事を忘れて、恋に狂ってしまうほどの飛び切りの美女。謎の多い役割で、大きな秘密を握っているこのクレアという美女の存在とその役割が、物語を面白くさせている。

第2は、1992年、ソ連のゴルバチョフによって明らかにされた歴史上の事実としての「カチンの森の大虐殺」。1943年4月、ロシアのモスクワの西にあるカチンの森に約4000体のポーランド将校の死体が発見された。これは、ドイツ軍の発表によると、1939年にソ連の共産軍に捕えられたポーランド人将校たちが、翌1940年春NKVD（ソビエト秘密警察）によって大虐殺されたということだ。もちろん、ソ連は、これをナチスドイツによる、「デッチ上げ」だと否定して反論。15年間にわたって、その論争が展開されたとのことだ。「連合国」側も、第2次世界大戦中は、連合国軍であったソ連との「友好関係」のため、そして大戦終了後は、米ソ冷戦構造に無用の刺激を与えないため、この問題についての追及を避け、曖昧なままにされていたとのことだ。「エニグマ」によって打電されていた、この「カチンの森の大虐殺」に関する暗号を、トムと共に解読するのがヘスター・ウォレス（ケイト・ウィンスレット）だ。

### <もうひとつの歴史上の事実>

もうひとつの歴史上の事実は、ブレッチリー・パークにおける暗号解読本部（チーム）の存在自体が長い間秘密にされていたことだ。すなわち、ブレッチリー・パークはロンドンの北97キロにありヴィクトリア朝時代の建物をその本部としていたとのことだが、戦争終結後も「機密法」が実施されていたため、1970年代前半までは暗号解読本部での仕事は一般市民に知られることはなかった。またその機密規則は非常に厳しかったため、50年経った時点でも、当時暗号解読本部で働いていた人々は、その仕事の内容を決して

口にしなかったとのことだ。

したがって、暗号解読本部の存在も「カチンの森の大虐殺」と同じように、1990年代に入ってから、明らかにされた歴史上の事実だ。

### <イギリス人俳優によるイギリス映画>

この映画は、2001年のイギリス映画。出演者もイギリス人ばかり。主演のダグレイ・スコットは、『M: 1-2』（2000年）でトム・クルーズの敵役として出演したが、それほど有名な俳優ではないし、美女クレアを演じたサフロン・バロウズも認識度は低い。唯一人有名な女優は、ヘスターを演じたケイト・ウィンスレット。『タイタニック』（1997年）で一躍世界中に有名になったあの女優だ。

ヘスターはクレアと一緒に1軒家を借りて同居している同僚。クレアが二晩も帰ってこないトムに話しかけたことから、ヘスターの活躍が始まるが、当初は美女クレアの影に隠れた存在。化粧気もなく、メガネをかけた、どちらかという、さえないネーちゃん。ところが、ヘスターは、クロスワード大会で男を打ち負かせただけの智恵があるうえ、1人で資料室に忍び込んでデータを集めてくるという度胸も持っていた。命がけの共同作業の連続の中で、トムとヘスターの2人は急接近。その中でヘスターの魅力が次第に輝きはじめ、トムもやっとそれに気付くという流れだ。

美女クレアの出演場面は少なく、その魅力だけを見せて、謎の部分を示せばよい役柄だが、ヘスターは準主役としてホンモノの演技力が要求される重要な役割。さすがにケイト・ウィンスレットはそれを見事に演じている。しかし・・・『タイタニック』では、若さと共にそのグラマーぶりが魅力だったが、この作品では、さすがにちょっと「太り気味」・・・天下の名女優なんだから、もう少し何とかして・・・願うのは、スケベおやじのわがままか・・・？

### <総評—脚本の良さが決め手>

私は、こういう映画が大好き。第2次世界大戦という時代の中、「エニグマ」の暗号解読に挑戦し、それに生命をかける人物像そのものに興味を惹かれるうえ、歴史上の事実もいろいろと学ぶことができるからだ。そして、そこには、もちろん男女の絡みも必要・・・。

この映画は、暗号解読という難しい問題をテーマとしながら、Uボート軍団に狙われた輸送船団救出のため、暗号解読に生命をかける緊迫感と隠された歴史上の事実へのアプローチを描いたすばらしいもの。1時間59分という時間があっという間に過ぎてしまった。このように手際よくまとめられたのは、原作の良さもさることながら脚本のすばらしさに負うところが大きい。

この映画の脚本は、『恋におちたシェイクスピア』（1998年）で、アカデミー脚本賞、ゴールデン・グローブ賞、バルリン映画祭銀熊賞、イヴニング・スタンダード賞、アメリ

カ・ライタズ・ギルド賞など、数多くの賞を受賞したトム・ストップードの脚本だ。  
とにかく、第1級のおすすめ作品。是非多くの人たちに観てもらいたい。

2003（平成15）年6月2日記